

自伝的記憶における想起ツールとしての写真の役割

1 3 3 2 0 2 8 岡林直弥

指導教員：山崎治 准教授

1. はじめに

現在、写真の解析技術が向上し、アルバムを自動作成するサービスが生まれている。代表例として、FUJIFILMの「Year Album」がある。FUJIFILMのアルバム自動生成では、日付・人物の顔・ピントなどから類似性を解析し、採用する写真を選択している。また、iPhoneでも2016年9月から写真アプリにアルバム自動作成機能が追加され、今後も関連技術の進化や多様化が予想される。

山下(2006)は、「写真と思い出」の關係に着目し、思い出を共有するツールとしての写真の役割について検討した。調査結果から、集合写真や自身が写る写真を大切に思う傾向があると指摘された。また、写真そのものより、出来事や人物との関係も含めた「語り」も重要であると指摘された。山下の指摘から、人々が思い出を振り返る写真の内容には特徴があると考えられる。その特徴を、アルバム自動生成の写真を選択する際に取り入れることができれば、より満足度の高いアルバムになるのではないだろうか。そのためには、写真を手掛かりとして何をどのように想起するのかを検討する必要がある。

2. 目的

本研究では、自伝的記憶と写真の関連性に着目した。写真を手がかりに自伝的記憶がどのように想起されるのかを調査することを目的とする。自伝的記憶 (autobiographical memory) とは、過去の自己に関わる記憶の総体である。特に、「場所」と「イベント」の2種類の写真を用い、カテゴリーの違いによって想起のされ方にパターンや傾向の差が出るのかも調査する。

3. 実験

本実験では、写真(場所・イベント)が自伝的記憶の想起のされ方や内容に及ぼす影響を調査する。

3.1 方法

実験参加者： 本学3、4年生10名(男性7名/女性3名)が個別に実験に参加した。

実験計画： 写真の種類(場所・イベント)に応じた1要因2水準参加者間計画で実施した。

材料： 写真20枚(新習志野校舎やその周辺など「場所」に関わる写真10枚と、大学祭やその他大学の行事、季節の写真など「イベント」に関わる写真10枚) / 分析用データシート / 記録用ビデオカメラ

(HDR-CX390)、ボイスレコーダ(ICD-TX50)

手続き： まず、10枚程度の写真の内容がわかるかを確認した。その後、それらの写真を参考資料とし、大学生の頃の思い出について話してもらう。参加者の語りはビデオカメラ、ボイスレコーダで記録し、必要に応じて質問をする。また、実験中に話題が思いつかないなどで沈黙が続いた場合に、想起のヒントとなるような例えをこちらから提示する。

3.2 結果

「場所」と「イベント」の平均想起数(表1)をt検定で比較したところ、有意な差はみられなかった($t(7.69)=1.33, p=.22, r=.43$)。

表1: 平均想起数

	場所	イベント
平均想起数 (標準偏差)	11.0 (1.26)	9.4 (1.62)

また、想起内容に対する感情や想起内容の共通性に関しても比較を行ったが、大きな差はみられなかった。一方、想起内容の期間に関して「1日」は1日単位の出来事の話、「期間」は「ある一ヶ月の間」や「冬の間」など特定の期間での出来事の話、「パターン」は「毎週」や「毎年」、「〇〇があったとき(はいつも)」など期間に規則性があった出来事の話、と定義して分類した(表2)。 χ^2 検定を行ったところ、有意な差がみられた($\chi^2(3)=24.25, p<.01$)。

表2: 期間に関する想起数

	1日	期間	パターン	その他
場所	17	14	19	5
イベント	37	4	6	0

残差分析を行った結果、1日単位の内容に関しては「イベント」の方が多く、それ以外では「場所」の方が多いということがわかった。

4. まとめ

想起数に関しては、「場所」の写真の方が若干多いという結果になった。写真に写っている場所やイベントの利用頻度が関連していると考えられた。

想起内容の期間に関しては、「場所」の写真では期間の長い出来事が多く、「イベント」では1日単位の出来事が多い結果となった。「場所」が2年間利用していた新習志野校舎等の写真、「イベント」が1日や短期間のイベント等の写真であることが、そのまま想起内容の期間にも表れたと考えられた。

想起内容の共通性に関しては、若干「場所」の写真の方が共通性は高いが大きな差はみられないという結果になった。また、「場所」の方が写真に写っている内容から視覚的に想起していること、「イベント」の方が写真の主題(場所だとその写真の場所、イベントだとその写真のイベント)と関係の無いことが多く想起されていたことがわかった。これらが共通性に関連している可能性があるが、個人差の影響も大きいと考えられるため、実験の参加者を増やして再度検討する必要があると考えられる。

参考文献

佐藤浩一・越智啓太・下島裕美(2012)「自伝的記憶の心理学」北大路書房

山下清美(2006)。「思い出共有ツールとしての、写真」人工知能学会全国大会論文集, JSAI06(0), 152-152.